

## ●行きは良い良い、帰り？は怖い

今月初旬、学生時代の同期・同サークル仲間数名で会合を持ちました。現役の大学教官で何かと声の大きいY君の発案で、不透明感増す経済情勢につき、国内外の証券運用畑を歩んできたS君による2時間ほどのレクチャーを高田馬場のレンタル会議室で受けた後、河岸を変えて酌み交わしながらのフリートークに雪崩れ込むというものでした。

どんな話になるのか楽しみに出かけたのですが、手渡された十数ページの準備資料のタイトルが『行きは良い良い帰りは怖い～異次元金融緩和の帰り道』となっていて、当欄でも何度か触れている黒田日銀の金融政策がテーマとして選ばれていました。そして、S君の認識・懸念もほぼ筆者と同様・同質だったのですが、筆者にとっては目新しいものとして、「高橋は清に心酔する安倍総理」というくだりがあり、考えさせられました。以下S君の資料から引用します。《1929年のウォール街株価暴落から始まった世界恐慌、昭和恐慌のさなかにあった日本は、デフレが深刻化するにつれ、リフレ派の意見がマスメディアで幅を利かすようになり、そういった中で、1931年の暮れに犬養毅内閣が発足、高橋是清が5度目の大蔵大臣に就きました。就任後すぐに高橋は金本位制からの離脱を決定し、翌年11月に日銀は政府が発行する国債の直接引き受けを開始、政府はそれによって得た資金で財政支出を急膨張させ、1935年度の一般会計、特別会計の歳出合計額は、31年度比79%も膨張しました。昭和恐慌で3分の1にまで暴落していた株価は急回復し、為替も31年の2円前後から33年には4円前後と大幅な円安となり、これを主因に日本の輸出は32年から37年にかけて3倍に増加しました。〈中略〉高橋は、国債の日銀引き受けを中心とするリフレ策は、危機対応の一時的政策と認識していましたが、この政策は社会にモラ

## 野田真のこんなの発見(46)

### 日銀は「金融災禍」リスクの説明を

ル・ハザードを起こし、財政規律が乱れていくことへの世論の警戒感の後退、特に軍部は国債増発による軍事費の大幅拡大を要求、軍部と衝突した高橋是清は1936年の2・26事件で暗殺され、その後、財政の膨張に歯止めが効かなくなり…》

以後、1940年代の前半にかけて日本がどうなり、戦中・戦後に国民が生活経済面でどんな経験をしたかは言わずもがなでしょうが、上記引用の中心人物である高橋是清について、2度目の就任から半年後の2013年6月、安倍首相はロンドンで、「高橋は1931年にケインズを先取りする政策を打ち、日本を世界に先駆けて(大恐慌から)救い出すことに成功したのです。高橋は、私を勇気づけてやまない先人です」という演説をしています。先立って始めたアベノミクスと、その最重要の柱であった「異次元の金融緩和」を念頭に置いていることだったのでしょ。

### ●リスクの明確な説明を聴きたい

関連して連想してしまうのが、この春の日銀人事です。とりわけ気になるのは新たに副総裁になった若田部正澄氏。「(物価上昇)2%達成以前はの出口戦略の発動はあり得ない。達成したからとすぐ出口をやることもあり得ない」と据わった目で断言し、達成が見込まれる2019年度頃には「出口を検討し議論していることは間違いない」とする黒田総裁の上を行く超リフレ派。既に日銀が発行額の4割を保有する国債についても「まだ6割残っている」とし、「金融政策(緩和策)には限界がない」とも主張。2・26事件の青年将校を思い浮かべてしまいました。出口=帰りに入る前から十分に怖いのです。

そして、政権がこういう人をわざ

野田真 生活経済ジャーナリスト

私たちの「生活経済の将来」という観点から対象・テーマを選び、実際の見聞・体験を通じて知り得た・学んだ・考えさせられたことを、できるだけ鮮明にお伝えします。

わざと選んで金融の舵取りの一翼を担わせるということは、682号にて半ば冗談で言及した、財政規律など何処吹く風の「超アベノミクス」化も念頭に置かれているのかもしれない。現下、安倍政権は一種の危機でしょう。しかし、「忖度」どころか「心酔」する人々も決して少なくないことから見て、このまま長期政権化する可能性も十分にあります。

であれば、説明を聴きたい。冒頭の会合の中でも感じたことですが、学校を出てから今までそれぞれの場でそれなりに生きてきた同期生のうち、レクチャーの内容を十分に理解し、我が身に引き付けて考えることのできた会合参加者は、話をしたS君と商売柄、金融情勢を追い続けている筆者以外には居なかったと思います。そしてそれは、社会全体に共通する傾向ではないでしょうか。

同じ災禍の可能性でも、天変地異や軍事に関してはその恐ろしさが重ねて周知・強調され、対処のための訓練も行われていますが、この金融災禍の可能性については、何も行われていないに等しい。自ら「異次元」と称したのですから、政府および日銀には、失敗した場合に何が起こるか、私たちの生活がどうなるかをわかりやすく説明する義務があるはずです。例えば、長期政権化し現下の金融政策が続く限り、預貯金には絶対に利息が付かない、付く場合にはそれを遙かに上回るインフレが襲っている可能性があるというような説明から始めてもいいでしょう。

もちろん、同時にいい話も聴きたい。若田部氏が言うように国債や株をますます買い進め、さらに大幅な財政出動を加えると、どんな輝かしい未来が開けるのかについても十分に説明して欲しいと思います。